

# レジリエンス 経営のすすめ

Vol.6

首都機能が完全に麻痺しても瞬時に  
ビジネスをローンチできるのが、本当のレジリエンス

text by Gen Matsuda

文 松田 元

模を最小限に抑える策を事前に準備しておくことが、「対応力」であり、その具体例は以下である。

- (例)
- ・地震に備えてサーバーラック（ネットワーク機器などをまとめて収納するための専用棚のこと）を固定する
- ・津波や浸水などの水害に備えて、浸水を妨げるドアを設置する
- ・新型インフルエンザに備えて予めワクチンを接種しておく

また、実際に被害を受けた際に、早急に復旧するために事前準備をしておいた手順の策定が、「復旧力」である。具体例は以下である。

- (例)
- ・地震の揺れによって固定していたサーバーラックが倒れたとしても、すぐに手作業に切り替えて事業の再開がで

きるように手順を策定

- ・水害によって建物浸水が起ころう、自宅などから業務の継続が行えるよう、社内システムへのリモートアクセスの手順を策定
- ・新型インフルエンザの影響によって、作業要員が手薄になっても、すぐに他部門から業務スタッフが駆けつけて事業継続できる手順を策定

前記の例は身近に対応できる例である。

それぞれの施策を全て個別に準備することができれば最も効果的ではある。しかし、「対応力」の対策には相応のコストがかかるため、準備し切れない部分が出る場合もある。その場合は、「復旧力」の対策で補うことができる。

このように、投資対効果の判断によって「レジリエンス」力の高め方は異なったり組み立てておくことが必要となる。それに加え、常に自社の事業としての在り方に疑問を持ち、変化する社会との接点を見直す。コア領域とノンコア領域を分け、「ぶれない軸」を明確に打ち立て、他社と「柔軟」に連携しながら「レジリエンス・コミュニティ」を組成しておく。現行事業のBCM/BCPに加え、理念探求型のあるべき姿を模索しながら、常に身軽で手軽な意識を持てば、災害時、緊急時においても、瞬時にビジネスをローンチできる企業づくりが可能になるだろう。

「大きな障害に直面しても押しつぶされない」と強い気持ちを持つことは素晴らしい。ただ、自然災害においては、気持ちだけでは持ちこたえることはできないのも現実だ。そこで、事業継続につながる具体的な強化策の一つとして「対応力」と「復旧力」を養うことも大切になる。

災害などに対応するため、被害の規てくるが、守りの力（Defense）と攻めの力（Offence）と適応性（Adaptive）をバランスよく加えることが基本戦略と言える。

その上で、事業組織の執行機能を統括する取締役のもと、事前分析により重要課題（軸）を見極め、明確な意識を持ちながら、それぞれに対応するレジリエンス戦略を実施することで、強くないやかな企業体質が生まれる。レジリエンス経営の要諦は「ぶれない軸」と「柔軟性」であり、有事に備えて、BCM/BCPで事前にカバーできる部分をバランスよく準備しておくことは重要である。

2011年の東日本大震災の影響によって、多くの企業が長期の事業活動停止を余儀なくされた。

また、2016年4月の熊本地震で

今後、そういった災害で同じような被害状況に至らないために、企業は組織として、レジリエンスを基盤としたBCM/BCPの理解を通じ「レジリエンス」力を高め、災害緊急時における「対応力」と「復旧力」を平常時か

「レジリエンス経営のすすめ」  
〜現代を生き抜く、強くないやかな  
企業のあり方〜  
（日本地域社会研究所刊）



## Profile

実業家、投資家。  
早稲田大学商学部卒業。在学中より学生ベンチャーを創業。  
同時期、複数のベンチャー企業におけるインキュベーションを実施。  
卒業前の2006年2月、アズ株式会社を創業。  
現職は、株式会社オウケイウェイヴ代表取締役社長、OKfinc LTD. CEO、Wowoo Pte.の事業・技術開発支援を担う。